

受検番号

注意

- * 答えはすべて縦書きとし、解答用紙の決められた欄に書き入れなさい。
* 字数には句読点も含みます。
* 漢字は楷書、平仮名は現代仮名遣いで書きなさい。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

持続可能な地域づくりを目指す中国のNGOの人々と一緒に、秋の滋賀を訪ねた。最初にこのスタディ・ツアーの相談を受けた時、とっさにぼくは琵琶湖沿岸のことを思った。もちろん、そこにいろいろなおもしろいローカル・ムーブメントが起こっているからのだが、それ以上に、ひとりのキーパーソンの顔が思い浮かんだのだ。

それは滋賀県立大学の上田洋平のこと。彼の協力があれば、きっとすばらしいスタディ・ツアーになる、というぼくの前感は一瞬現実となった。

上田は滋賀をフィールドとする地域学の研究者であり、同時に、地域づくりのために行動する活動家でもある。この数年、ぼくはこの若き友人の案内で、琵琶湖周辺に展開する様々なプロジェクトを視察、多くを学ばせていただいた。

上田が開発した地域学の方法に「心象図法」がある。これは、(1) 地域に暮らす人々の五感体験に関するデータを集め、(2) それをもとに聞き取りを行い、地域の生活誌を記録、(3) それを一枚の「心象絵図」、(4) 「ゆるきと絵屏風」などとして表現し、(5) それを地域の教育文化活動に活用する。この過程の各段階に地元民が思い思いの仕方に参加し、共同作業を行う。

この方法が今、注目を集めている。上田は全国各地をまわって、この方法を伝えながら、地域づくりを応援している。

「心象図法の実践とそのころ」という冊子で、上田は、この方法の背景にある思いを、彼が学生の頃に書いたという詩「輪郭」によって表現している。

| | | |
|------------|--------------------|---------------|
| 鉛筆で | みみずの周りに土ができる | 雲と空と |
| 魚の輪郭を描くと | 雲を描くと空ができて | 星と闇と |
| 魚の周りに水ができる | 星を描くと闇ができる……(中略)…… | どちらがどちらの輪郭なのか |
| 鉛筆で | 魚と水と | あたえあってつくる |
| みみずの輪郭を描くと | みみずと土と | 輪郭 |

ここに表れた上田の世界観は、今は亡き友人、ピーター・バーク(一九三八～二〇一一)が提唱し、世界各地の地域運動に大きな影響を与えてきた「生命地域(バイオリジョン)」という言葉と連想させる。

ピーターはこんな風に説明していた。我々は皆どこかの土地に住んでいる。当たり前のことだ。しかし、ここにはまだ神秘的で、極めて重要なことが隠されている。それは、我々が生活しているこの場が「生きている」ということだ。

つまり、地域とは、固有の地形、土壌、水の流れ、日の光、風、湿度と、微生物から動植物までが織りなす独特な生命の場である。そして人間とは、そこに住み込む共同体の一構成員として、この場から切り離しえない存在だ、と。

しかし産業化し、都市化した社会では、「地域」は等質で無機的な空間におとしめられている。これは、人間が輪郭を失って取り替え可能な存在になっていくことをも意味している。また地域との冷やかな関係は、資源を獲得つくした企業や、より安価な労働力を求める企業が、次の地域へと移っていくやり方にも見られる。

ピーターによれば、こうした地域との切断こそ、環境危機の、そして様々な人間的不幸の原因がある。これに対して、彼は「住み直し(リ・インハビテーション)」を唱えた。つまり、もう一度地域との間に有機的で暖かみのある関係をとり戻すために、そこに「住む」ことを学び直そう、と。上田さん風に言えば、地域と自分の双方に、同時に、「いのちの輪郭」をとり戻すのだ。

滋賀で、日本のあちこちで、そして世界中で、今、「住み直し」の気運が高まっている。ピーターもそれを感じながら、旅立っていったにちがいない。

- (辻 信一 『よきことはカタツムリのように』による。)
(注) スタディ・ツアー＝NGO(非政府組織)の活動を実地に見学し、体験する旅行
心象＝心の中に描き出される姿、かたち

問一 ―― 線部とは最終的にどうすることを意味しているのか。本文中の言葉を用いて六十五字以内で説明しなさい。

問二 あなたは、「地域」とどのように関わっていくことが大切だと考えますか。具体的な関わり方を挙げるとともに、あなたがこれまで「地域」とどのように関わってきたかにも触れながら、二百字以内で書きなさい。(原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。)